
それはひと時の長い平穩

空橋紡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それはひと時の長い平穩

【Nコード】

N0559Q

【作者名】

空橋紡

【あらすじ】

時期は大体バルトの新しい相棒を手に入れて、シャーカーンをぶっ飛ばしたあたりです。
ある日の夕食、そこにはいつもの食堂の風景に、ぐるぐる巻きに縛られたバルトの姿が。

(前書き)

時期は大体バルトの新しい相棒を手に入れて、シャーカーンをぶっ飛ばしたあたりです。

簡単なバルマルSSですが、どうぞお楽しみください。

「あの……マルーさん、これは一体どういう状況何でしょうか？」

ユグドラシルは今日も平和です。

ここはユグドラシルの食堂室。一日の仕事を終え、今日も一日がくばったなあと続々と一日に消費されたエネルギーを取り戻すために食を求めてやってくる。

丸いテーブルが並べられ、今日の出来事を笑い話に変えながら箸を進める乗組員たちの中に、金色の長髪に眼帯を掛けた青年、このユグドラシルの持ち主バルトは、座っていた。

背もたれに縄でぐるぐる巻きにされ、動けない状態で、である。

話は少し時間を遡る。今日も一日が終わり自分のギアの整備をしていた時のことである。シャーカーンからのアヴェ解放の際に封印が解かれ、バルトの新しい相棒となったギア・バーラー、E・アンドヴァリ。

しかし、だからといって今まで苦肉をともししてきたブリガンディ

アへの愛着が消えることはない。そのため、こうして定期的にメンテナンスをしているのである。部下に任せるのではなく、自分自身で行っているのは、それだけ思い入れがあるということ。

顔にはオイルと汗。そろそろ飯にするか、と腰に手を当てストレッチをする、今まで座つての作業が多かったためか腰からボキボキという音が一齐に響き渡った。手に持ったニツパーで凝り固まった肩を叩いている背後に、ゆっくりと忍び寄る影が三つほど……。

ブリガンディアの背後から聞こえた物音に反応するバルト。次の瞬間、反転。

一人人の上半身が入りきりそうなほど大きな袋に頭から被せられたバルトは、何の抵抗もできないまま拉致されてしまった。

エリイ、フェイ、リコ達の連携によって。

まずは、エリイがエーテル力を使って遠隔操作でブリガンディアの後ろ回りから物音をたてる。その音に気を取られたバルト目がけて行きしがけにビリーに女神のエールをかけてもらったリコとフェイ

が袋と縄を持って突貫。

「過程はわかった。次に理由を言ってくれるとたすかるな」

「これを食べてもらおうと思ってね。みんなに協力してもらったんだ」

「それがどうしてこの状況につながるんだ！」

「ほら、逃げないように。この前若のために作ったらさ、ナイフとフォークを持ってくる間に逃げたじゃないか」

「う、それで……お前ら……」

後ろを振り返ると、苦笑いを浮かべるエリイ、片手ですまんと謝るフェイ、こちらに目を合わせないリコが気まずそうに立っていた。

「マルーに頼まれて……必死みたいだったからつい……」

「エリイに頼まれたら断れないだろう？ 悪かったって……」

「……………」

「リコの旦那はビリーさんの妹さんに根気負けしたんっすよね」

「ハマー！ てめえ！」

「ひいひいひい！」

余談ではあるが、フエイが頼んだ時は断わられたが偶々近くにいたプリメーラがマルーの話を聞いてリコに「おねがいます」と書かれた紙を片手にリコの手をつかんで離さなかったらしい。

逃げるハマー、わかりにくい顔を真っ赤にして追いかけるリコ。

「マルーの料理、普通においしかったわよ？ どうしてそんなに嫌がるの？」

マルーは決して料理が下手なわけではない。むしろ、人並み以上の腕である。エリイも手伝いだったがほとんど手伝うことが無かったほどだ。一緒に味見を試みたが、十分おいしかった。

エリイに見れば、不思議でしかなかった。バルトの嫌いなものが入っているわけではないし、味もバツチリ。どれにも関わらず、

逃げたがるバルト。

ジタバタと必死に縄を解いて逃走を試みるものの、いくらやっても抜ける気配のない腕にようやく観念したのか肩を落とし、あきらめたように息を吐く。

「なんだ、そんなに嫌なのか、マルーの料理は？」

「ちげえよ、そんなんじゃねえんだよ。あいつの手料理の味は問題ねえ。俺が保証する」

「ならどうして？」

「……………どうして、顔を赤くするの？」

「料理が問題じゃねえんだよ。問題は、そこじゃねえ」

なにやら顔が赤くなるバルトを不思議そうに眺めるフェイとエリイ。何回か口ごもりながら、渋々とその問題を話した。

「別に、あいつの手料理は昔から食ってたし、上手かったし。だがこの前、ちょうどアヴェの件の後辺りに久々にどろろという流れになって、そついや最近食ってなかったから懐かしいなあと思いつながら待

つてたんだが、あいついきなりフォーク持って「あ〜ん」と化してきやがって！ その時はそのフォーク落として代えを持ってくるときに一気に食べてトンずらしたが、それ以来根に持ったのか必要に付け回してきやがって……………」

フエイとエリイは恥ずかしそうに告白するバルトを見ながら顔を合わせて、頷く。

「バルト、往生際が悪い。マルーも大変よね、こんな無神経で」

「人の事は散々言う癖に、自分のこととなると途端にこれだからなあ。本当に、往生際が悪い」

「な！ なんだよ二人とも！その言いぐさは！」

「若くおまたせ〜！ 今日はいつも以上の自信作だよ〜」

「それじゃ、邪魔ものは別の席に移ろうか」

「そうね。がんばってね、マルー」

「うん、ありがとだね二人とも。後でリコさんにもお礼言っておいて」

「二人とも！見捨てるな！メイソン！シグルド！誰でもいい！誰か縄を解いてくれー！」

ちなみに、後に食堂室からは満足感に満たされたマルーと、異常なまでに衰退したバルトが一緒に出てきたそう。もちろん、逃げられないように縄で縛られマルーが手綱を持ったまま。

今日もユグドラシルは平和です。

(後書き)

いかがだったでしょうか。一応、前にブログにのせたのを少しだけ
変えたりなんざりしてみました。

楽しんでいただけたら、よかったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0559q/>

それはひと時の長い平穩

2011年1月16日02時04分発行